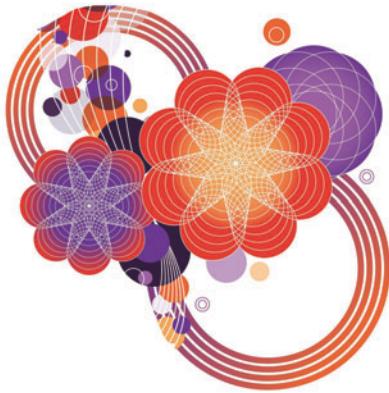


Contents

はじめに	4
第1章 30年後の社会を見据える「けいはんな未来」懇談会のあり方	
①30年後の社会を見据えるということ	5
②起こり得る未来を認識する—シナリオプランニング	5
③30年後の課題感	6
第2章 けいはんな学研都市の現状	
①研究・開発	9
②産業	10
③文化・芸術	10
④教育	10
⑤住民・生活	11
⑥都市基盤	12
第3章 けいはんな学研都市の課題	
①研究・開発	15
②産業	16
③文化・芸術	16
④教育	17
⑤住民・生活	17
⑥都市基盤	18
第4章 30年後のけいはんな学研都市のあるべき姿、ありたい姿	
①持続可能な街づくりを目指して	20
②文化的資産による地の利の活用	20
③けいはんな学研都市のコンセプト基本概念	21
第5章 30年後の街づくりを考える時のポイント	
①研究・開発	23
②産業	23
③文化・芸術	24
④教育	24
⑤住民・生活	24
⑥都市基盤	25
第6章 30年後の社会に向けて	
①奥行と広がりのある街づくり	26
②次の10年の方向性仮説	26
③30年後の社会に向けて	27
第7章 これからの取り組み	
①アプローチのあり方	28
②目指すべき方向性	29
③大学との新たな関係の構築	29
④シンクタンク機能を中心とした知の協業と発信	29
⑤けいはんな学研都市のあり方を検討する目線	30
「けいはんな未来」懇談会 2015年度開催経過	31
公益財団法人国際高等研究所の概要	33



はじめに

関西文化学術研究都市(以下、「けいはんな学研都市」)の建設の礎となった1978年の関西学術研究都市調査懇談会(通称奥田懇)の発足に際しては、1972年に発刊されたローマクラブの「成長の限界」が大きな影響を与えたとされる。ここでは、地球のもつバイオキャパシティには限界があり、このまま漫然と人間活動を続けていけば早晚危機を迎えるという、現在でいう「持続可能な社会の構築」が急務であることを訴えていた。

けいはんな学研都市の創設機運が醸成された時点において、「知的資源の有効活用による人類的課題への学術的挑戦」、「我が国における学術研究機能の再構築の必要性」、「世界の中の日本の役割認識と日本からの発信機能の充実強化」をミッションとし、国際高等研究所(以下、「高等研」)の構想が進められ、けいはんな学研都市の「知の中核機関～知的ハブ」としての役割を果たすべく、1984年に設立された。

けいはんな学研都市は、最初の街びらきから、30余年が経過し、その間およそ10年ごとに目指すところを設定してきた。今日までに3つのステージを経て進化を重ねてきたが、2016年度からは次の10年を築く新たなステージを迎える。けいはんな学研都市では、土地・道路の造成、研究施設の誘致・建設といったハード面の整備についても更なる進展が望まれるが、この街の未来に向けては、この30年間の様々な変化を反映しながらも、「当初のミッションをいかに実践していくか」というソフト面も充実させるべき時期に移行してきている。

30年先となれば、地球資源の枯渇、人口や環境問題などがより深刻になっており、これまでのような進歩発展史観は成り立たず、資源の循環的で効率的な利用、定常経済社会の実現を目指していくことになるだろう。そういう未来に軟着陸していくため、科学技術や経済、産業、その他社会活動が如何にあるべきかについて真剣に議論し、検討することが求められている。

このような背景のもと、「何を研究するかを研究する」ために設立された高等研として、「けいはんな学研都市の30年後に向けたコンセプト」の構築のために英知を結集していくことが正にその使命であると捉え、「けいはんな未来」懇談会(以下、「未来懇」)を主催することとした。けいはんな学研都市のこれから10年の計画を作成するタイミングで、その活動と並行して、30年先の未来における社会のありようを見極めバックキャスティングにこの街のあるべき姿を描く未来懇により、この街の未来に寄与できれば、本検討に携わる者にとって望外の喜びである。

ここから街づくりの新たな視点と方向性を盛り込んだコンセプトが提示でき、それを実現していくために、けいはんな学研都市にかかわるすべてのステークホルダーが協力して取り組んでいくことができれば、それが輝かしい未来を築いていくための第一歩となるだろう。

